

# すいげ ぼり何 未知標

下鴨中通回想編



あっという間に寸分たがわぬ皮がつくられる。見事の一言。



**ひさうちみちお**  
1951年11月17日京生まれの漫画家。1976年漫画雑誌「ガロ」にてデビューする。現在レギュラー連載は「ミーツリージョナル」と「マンカガウティ」で、イラスト付き人相図誌。代表的著者は「ラビリンズ」、「夢の贈物」、「拝郎」、「日本人の誇り」、「唄の上手な娘」等。最新刊「正しいお母さん」を5月に新刊予定。

漬物と中華風サラダの中間みたいな前菜の後に、いよいよ水餃子を出してもらう。店内はけっこうゆったりして居心地良い。



娘さんは小さな子供の時に日本に来たから日本語はパーフェクト。それでも中国語はお母さんとすこく早く喋れる。これは英語なんか喋る女より十倍かっこいい。



娘さんが帰ってきてみんなで乾杯。水餃子だけでなくいろいろなお料理を出してもらった。ホントに馳走さまでした。



中国の餃子は具に味がついててタレをつける必要はない。皮も日本の餃子と違って独特の舌触りがある。量も多いよ。

中国語の読みかたも教わった。今度仕事じゃなく行ったらもっとならわりたい。



下鴨通りを北大路から南に向いてプラプラ歩こうとゆうその日は朝から雨がふっていた。編集部M氏からの電話では「雨ですがやりましょう」とゆうことなので小雨かと思いきや出る。ところが自宅からバス停まで歩いてる間に雨は本降りとなり、おまけにさして傘を飛ばしそうな勢いの風まで吹いていた。バスに乗った時は全身濡れねずみで大いに意気下がるスタートである。編集M氏によつて今日はやめましょうと言いかけた気持ちもハイにもり上げてくれたのが栗仙楼の水餃子と紹興酒のアツカン、そしてお店をやってらっしゃるお母さんの笑顔だった。

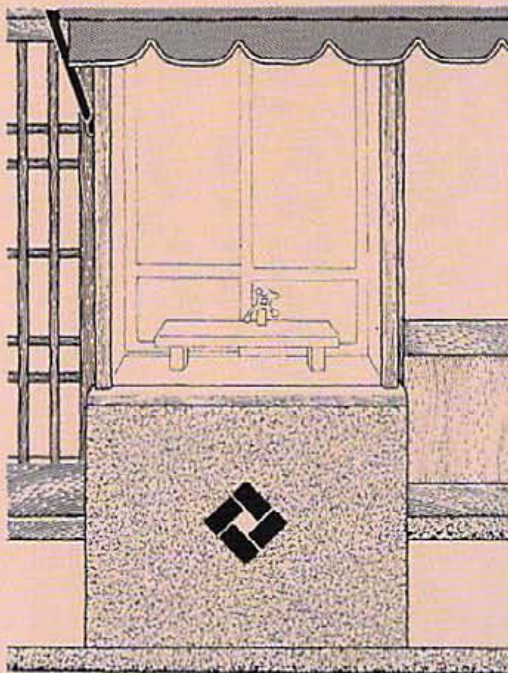
お母さんといつても僕を生んだ人ではない。M氏が親しみを込めていう「お母さん」は中国残留孤児である。日本人特有の愛想の良さや中国人のフランクな人なつこさの両方を持ち合わせたような人だ。僕がテーブルの前に座って「お母さん」に料理を出してもらってるところを写真に撮らせてもらったが忙しい時に何度もそのポーズをとってもらった。モデルでもない限りこうゆうことは不自然でうっとおしいものだが「お母さん」は嫌な顔ひとつせずにつきあって下さったのである。

他のお客さんの注文が一段落してから「お母さん」にも横に座ってもらって少しだけ話をさせてもらう。ちょうどその頃に娘さんが帰って来られた。「お母さん」と娘さんが喋る時は中国語である。僕は中国語は全然喋れないのだが何を言ってるか分からなくてもとにかく中国語を聞いているのが好きなのだ。紹興酒の小瓶を二本あけて少しほろ酔いで早口の中国語を聞いていると大変気持ちいい。

ほんわかした気持ちでその頃再放送していたNHKの「大地の子」を見てるかどうかが聞いてみるとやはり毎日見てるといふ答だった。自分に重なるところがあるからどうしても身につまされて泣けてくるらしい。僕も残留孤児をテーマにした映画やドラマを見るたびに泣いてしまうが「お母さん」の涙



餃子の皮のつくり方を教わる。横で見るとなんでもないようなことがなかなか出来ない。



下鴨中通りをずっと下っていったところにあった馬具の修理とみほしきお店。跡取りには乗馬の形をした金属製のヤジロペーがーリだけ置いてあるのが良かった。



和菓子屋さんの前の通り。ここを昔バスが走っていたそう。



下鴨中通りを北大路通を右へ曲ったところの十字路を右へ曲ったところの文房具屋「清水文具店」は和十年からやっています。

店の中でこのダイスだけがなんとなく日常からはずれた感があった。すごろく！とはいわないにせよモノポリーでもダイスは要る。百円。



御主人の妹さんが店番をなさってる。愛想の良い人でいろいろ面倒臭さがらずに教えていただいた。



道明寺粉で一生懸命和菓子をつくっておられる御主人。けっこう手間がかかりそう。ボールがいっぱい並んでる。

洗濯のりとかくれモン、鉛筆等の商品。わざとらしい懐古趣味でなく普通ほいところが気持ち良い。



和菓子屋さんの包装紙。日本画家の藤原みてい氏の筆になるもの。テーマが京都そのもの。

その文具屋さんを西へ少し歩いたところのうとん屋さん「てしま」には中通りよりまた狭いその通りを下鴨京極と呼んだ頃の写真があった。昭和十年頃に大水があつて当時はほとんど木造だった賀茂川の橋をあらかた流してしまつたらしい。う

子供の数が減っているとゆうのはその後お邪魔した文具屋さんでも同じことをいう。店内には不思議なほど今の子供が喜びそうなキャラクター商品は少ない。そうゆうものを置いた時もあるがさすがに買い手がなければ意味がない。その代わりでもないが懐かしい洗濯のりが定番商品の様に売られている。それもノスタルジックを狙つたようなわざとらしいデザインではなくそつけないほど当り前の顔してるところが気持ち良い。

下鴨中通りとゆうのは決して広い道とはいえない。普通の乗用車がすれ違えばそれだけでも道幅いっぱいになる。どれくらい昔のことかと聞くとそのバスが木炭バスだったというので二度驚いた。お邪魔した時ご主人は道明寺粉で和菓子をつくつておられた。幼稚園からの注文だそうだが以前は二百個くらいあったのが今は六十個くらいしか。子供の数が減っているのだ。

さて、文章量の半分近くになってようやくアラアラのスタートである。最初は栗仙楼を少し下がったところの和菓子屋「いろは」さんにお邪魔した。もう四十年もここで営業しておられる。ご主人に話をお聞きして驚いたのだが昔は店の前の通りをバスが通っていたそう。

は僕なんか流す気楽なものとは全然違つて現実の重みを持つていたのだらう。日本国の罪は単に子供達を満州に捨てただけではない。反右派闘争と文革を通じて中国の政策や権力闘争が極左方向へ尖鋭化したのはソ連の覇権主義と米国の中国包囲政策に理由の一端がある。その中国包囲に日本も加担していたことを忘れてはならない。なごり演説するページではなかった。すみません。雰囲気をもとましてですね、「お母さん」に餃子の皮のつくり方を教わつた。無敵全工程「お母さん」のやるようには全くうまく出来ない。いろいろ御馳走になった筈なのに餃子の皮のロスまで出してしまつてどうも申し訳ないのだった。

# 第18回 さざなみ賞 競走

## 5/7 8 9 10 11 12



びわこボート

●主催：滋賀県●後援：サンケイスポーツ  
 ●無料バス発着場：JR大津駅・JR西大津駅・三条京阪・四条大宮  
 ●テレホンサービス：0775・27・3000●電話投票番号：11

学生、未成年者は、船券投票券の購入はできません。

下鴨中通回想編

うどん屋「てしま」さんの入口の上にかけてあった大水の時の写真。昔の写真はネガが大きいのでけっこう鮮明に映ってる。



うどん屋さんの御主人。下鴨京極と呼ばれた昔の話などをいろいろ聞かせてもらった。



クリーニング店の店先にあった五十嵐じゅん子の等身大ポスター。この懐しさも決してわざとらしくない。



「のらくろ」の店内。天井に丸く板を並べたデザインが上品な柔らかなさを感ぜさせてくれる。なかなかシブイ。



「のらくろ」のマスター。職人の気持ちを持ち続けながら決して不愛想とゆうわけではない。



ポタージュスープ。いわゆる「洋食」の味を遥か及ぶマスターらしい深みのある手作りの風味。

どん屋さんのご両親が中央に映っているとゆうその写真には確かに下鴨京極にふさわしく商店が立ち並ぶ様子が見える。ご主人に聞かなければ現在の閑静な住宅地と同じ通りとは分からないだろう。ブラブラの最後にお邪魔したのは中通りです。下がったところにある「のらくろ」とゆうレストラン。そのあたりの静かな雰囲気と異和感のない上品で抑えたデザインの店内が心地良い。昭和三十年から四十年代のモダンイズムを感じることができて占拠さはない。昔は若くは松竹や京都映画の撮影所があった俳優やスタッフがよく食へに来たそう。その後は学生の客が多かったらしい。立命が移転する前のことで京大や同志社の学生も混然として賑ったとか。客数でいえばやはりその頃より少なくなっているのだがマスターはそうゆうことは全く気にならず料理の質がおちないことだけをこころがけておられる。職人としては当り前のこととおっしゃるがその語り口は愛想のない頑固おやじとはほど遠い。自然で気負いもない。思えばそれはこの通り全体に共通していることかもしれない。マイペースなどとう言葉が陳腐に聞こえるほど淡々とした無理のない暮しがあった。激動の現代中国を生き抜いてようやくこの地にたどりついた「お母さん」も今はその中通りの人である。